

# 日本社会心理学会会報

219号



発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>  
編集・制作 広報委員会(担当常任理事:藤島 喜嗣)

2019年6月25日

## 第30期役員あいさつ

2019年4月より第30期役員体制が始動しました。唐沢かおり会長ならびに6名の常任理事から会員の皆様へ、ご挨拶を申し上げるとともに、学会全体と今後の活動についてご説明申し上げます。

### 会長あいさつ

唐沢 かおり

このたび、日本社会心理学会会長を務めることになりました、唐沢かおりです。就任にあたりまして、ご挨拶とともに、任期中の課題につきまして、皆様にお伝えしたく存じます。

これまで、日本社会心理学会は、学会運営に携わってこられた皆様方のご尽力により安定的に活動を維持してきましたし、学術的にも領域のプレゼンスを示しつつ、他領域との連携も活発に進められてきました。この状況を継承し、「さらなる発展」という視座のもと、次の世代に引き継ぐことが、学会運営のコアとなる課題です。社会心理学という学問の射程範囲が拡大し、多様な分野との共同研究から生まれる成果の豊かさは目を見張るものがあります。人の社会性や社会的行動の特性に関する基本的な問いを探求しつつ、他領域と連携し相互に影響を与えながら成果を挙げている現状を社会に発信していきたいと考えています。

もともと、その流れの中で、今の私たちに課せられた課題には、重いものがあるように思います。多方面に展開する学問の流れの中で、多くの会員各位が活躍されているのはその通りですが、長期的には、会員数の緩やかな減少が見込まれ、学会を維持する仕組みについて、議論を開始する必要があります。また、大学のおかれている現状を踏まえると、学問の継承と発展という極めてシリアスな問いに向かい合いながら、日常の学務に追われ、研究時間の確保や、学生指導にじっくりと取り組むこともままならない状況に、個々の研究者が置かれていることも感じております。

かつて大学という場に流れていた緩やかな時間は失われ、顔を合わせると「忙しいよね、大変だよ」と言い合う。長期的な視野を持ち、研究や教育に取り組むことが困難になっている。しかし、そうであるからこそ、学会という組織の持つ意味を再考することが求められているのではないでしょうか。

会員としてここに集う方々の活動に資するためには、どのようなありかたが望ましいのか。これはここ何期かの学会執行部が継続して考えてきたことですが、今期もこの問いを引き継ぎながら、少しでも具体的なアクションにつなげていければと思います。すでに、浦前会長の任期中に、社会心理学関連学会のコンソーシアムが構想されていますが、「会員数問題」や「皆忙しい問題」があるなか、効率のよい学会運営のためにも、その構想を引き継いでいくことは必須です。その議論の中で、今後を担う、若手～中堅の皆様に対する支援のありかた、研究交流の基本となる学会大会の安定的な開催を可能にする仕組みについても、前期に引き続き、考えていく所存です。

加えて、今期から議論を始める必要がある案件として「公認心理師」に関することがあります。心理学の国家資格として、公認心理師ができたこと自体はめでたいのですが、その運用について、また、カリキュラムのあり方について、様々な問題が存在します。公認心理師自体は、一つの資格制度であると言ってしまうとそれまでなのですが、心理学教育のあり方のみならず、社会における心理学の立ち位置にも関連します。この話題は、例えば最先端研究に基づく学術動向の追求などとは、異なる次元にあるのかもしれませんが、私たちの知見が社会に「どう意味づけられるか」について、学会として無関心でいるわけにはいきません。公認心理師問題については、新たに委員会を立ち上げて、皆様方のご意見をいただく仕組みを作りたいと考えております。

以上、任期が始まるにあたって、思うことを述べさせていただきました。しかし、おそらく、様々な問題は、走り出してから生まれ、また気がつくものであるとも思います。二年間という短い期間ではありますが、常任理事、理事の先生方に支えていただきながら、学会として何をしたらいいのかを、皆様とともに考えていきたいと思います。ご支援、ご指導のほど、よろしく申し上げます。

(からさわ かおり・東京大学)

### 事務局担当

宮本 聡介

唐沢会長のもとで事務局を担当することになりました明治学院大学の宮本です。浦前会長のもとでは広報担当でしたので、横滑りに別の部署に移った気持ちです。とはいえ、広報担当のときは広報に関連する業務に集中していればよかったのですが、事務局担当となると学会全体のことを見渡す必要があります。“木を見て森を見ず”という言葉があります。私の性質を表すためにあるような言葉だと思っています。大所高所から学会

全体に配慮するという重責を果たせるかどうか、不安だらけですが、理事・常任理事の先生がたにご迷惑がかからぬよう、慎重に事務局の職務を進めてゆきたいと思っています。もちろん、私一人で事務局の職務をすべてこなしてゆくことは不可能と思っています。そこで、私の同僚である明治学院大学の小林麻衣子氏に、事務局担当補佐をお願いすることにしました。私の至らぬ部分を小林さんに埋めてもらいつつ、2年間務めさせていたきたいと思っています。

また、事務局としての責務とは別に、本学会にとって重要な案件についての解決策を模索する職務も果たしたいと考えています。いわゆる“公認心理師問題”です。公認心理師のカリキュラムが公表されたとき、多くの社会心理学者が戸惑い、困惑したのではないかと思います。ただ、この制度が施行され、いざ動き出してみると、必ずしもネガティブな問題だけが持ち上がっているわけではないようです。社会心理学者としてアカデミックな視点からこのカリキュラムを眺める場合と、公認心理師カリキュラムを支える教育者の視点からこのカリキュラムを眺めた場合では、どうも公認心理師問題の見え方が違うようです。少々抽象的な表現となっておりますが、詳細につきましては総会や会報等で、少しずつ現状をお知らせしてゆきたいと考えています。なお、この公認心理師問題については新たな委員会を立ち上げて検討することとなります。本学会員の先生がたの中から数名、委員をお願いすることになると思います。その際にはどうぞよろしくお願いいたします。(みやもと そうすけ・明治学院大学)

## 編集担当

村本 由紀子

この度、編集担当常任理事を拝命しました。引継ぎを受けてから2か月余、多彩なジャンルの投稿論文を拝読し、純粋に勉強になると感じる側面もある一方で、個別に判断すべき課題が異なり、重責に緊張することもしばしばです。幸いにも、頼もしい副編集委員長の大坪庸介先生(神戸大学)をはじめ、編集委員会には各領域の第一線で活躍されている先生方がお揃いです。編集幹事の鈴木啓太さん(東京大学大学院)、編集事務局の高橋尚子さん(国際文献社)のサポートもいただきながら、微力を尽くしたいと存じます。

編集担当の基本ミッションは、迅速かつ適切な審査体制をキープし、質の高い論文を掲載した『社会心理学研究』を滞りなく発行することです。前編集委員長の岡隆先生をはじめとするみなさまのご尽力のおかげで、今年度最初の号となる第35巻1号の発行に向けた見通しは良好です。しかしここ数年、投稿数の伸び悩みが続いており、長い目で見て楽観できる状況とはいえません。一方で、審査のスピードアップを目指すあまり、ご多忙を極めながらも時間を割いて丁寧な審査に努めてくださっている編集委員や査読者に過剰なご負担を強いては本末転倒です。ついては、投稿する側と審査する側のいずれの立場においても、多くの会員に気持ちよくご参加いただけるような体制を整えていくことを、常に心がけたいと思います。

今般、本稿の筆を執るにあたって過去の会報を手繰っていたところ、5年半前に刊行された第200号の中に「歴代編集委員長が語る、『社会心理学研究』と社会心理学のこれまでとこれから」という特集記事を見つけました。それによると、主査・副査のピアレビューによる現在の審査体制の基盤は、1990年代末の第19期に整備されたとのこと。第21期(2001-02)には電子メールを用いた投稿・審査が始まり(それ以前はすべて郵送でのやり取り)、第22期(2003-04)には他学会に先駆けて電子投稿システムを導入しています。いずれも、当時の本誌が抱えていた諸問題を、多くの方々が力を尽くして改革された成果であると、改めて感じ入りました。直近の数年間においても、主査の匿名化やデスク・リジェクション制度、編集委員会のWeb会議化など、審査者の負担軽減に貢献するとともに、投稿者にとっても審査期間の短縮というメリットをもつ仕組みが実現しています。採択論文の早期オンライン公開も、投稿者の利益を第一に考えた施策です。こうした先達の成果を受け継ぎつつ、国内外の最新の動向をも見据えて、さらなる改善への取り組みを一歩ずつ進めていく所存です。

みなさま、是非ご投稿ください。楽しみにお待ちしております。

(むらもと ゆきこ・東京大学)

## 研究支援担当

岡 隆

第30期の研究支援を担当することになりました岡隆です。この担当は、第28期までは渉外担当であったものが、第29期に研究支援担当と名前を変え、研究支援事業として、大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度の運営に加えて、これまで学会活動担当が分掌してきた若手研究者奨励賞を担当するようになり、渉外事業としては、これまで通り日本心理学諸学会連合に参加し諸学会間の連絡・調整をしてきました。このように第29期は過渡的に両事業を並行して担当してきましたが、第30期では、後者の渉外事業を免除され、前者の研究支援事業に集中することになりました。

大学院生や若手研究者を取り巻く環境は、ここ四半世紀の間に大きく変わってきました。そのようななか、大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度は、2005年度に始まった大学院生海外発表支援制度に2014年度より若手研究者を加えるかたちで運用されてきましたが、その基本的な枠組みは変ることなく今日に至っています。若手研究者奨励賞は、1983年度に始まっていますが、募集要項が確認できる2005年度以降、「若手研究者」の定義に多少の手が加えられたものの、やはり基本的な枠組みは変わっていません。これらの本学会の制度が、この間の社会や大学、研究環境の変化に対応し、大学院生や若手研究者にとって本当の意味でよいものになっているかを検証し、必要であれば大胆に制度を変更していきたいと思っています。これらの制度にかかる規程、募集要項、選考結果等は、ホームページで公開されていますので、ご覧いただき、ベテランの先生方の大所高所に立ったご意見はもちろんのこと、大学院生、若手研究者のご忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

昨年度より国家資格の公認心理師制度が始まり、日本の心理学界はそれへの対応を余儀なくされ、さまざまな課題を突きつけられています。社

会心理学に限っても、「社会・集団・家族」というくくりをはじめとして大きな困惑が広がっています。私は、前述のように研究支援担当としては渉外事業を免除されていますが、たまたまこの6月まで日本心理学会の資格担当、この6月からは総務担当の常務理事を務めています。日本心理学会でも、公認心理師制度の発足に伴い、日本の心理学界に向けて標準シラバスを参考提供したり、認定心理士資格や認定心理士(心理調査)資格にかかわって実務的な対応を重ねてきたりしました。唐沢会長からは、日本心理学会との連絡を密にし、情報交換を進めていきたいとの意向を伺っています。私も、日本社会心理学会の常任理事の一人として、お役に立てることがあれば微力を尽くしたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(おか たかし・日本大学)

## 学会活動担当

金政 祐司

この度、学会活動を担当させていただくことになりました金政祐司です。今期の学会活動担当の主な活動内容は、前の29期と同様に、春の方法論セミナーや夏のチュートリアル等を企画、実施することです。29期では、2018年3月の春の方法論セミナー(第5回)で「経験サンプリング A to Z」と「R/RStudio 入門」が、また、2018年8月の夏にはベイズ統計に関するチュートリアル、2019年3月の春の方法論セミナー(第6回)には「社会心理学者のための時系列分析入門」と「社会心理学者のための VR 入門」が開催されました。それらは、会員のみならずの研究促進に随分と寄与するものであったかと存じます。今期も引き続き、「会員の研究活動を推進発展させるための仕掛けを総合的に検討し、学術動向と需要に応じて、時宜にかなった内容の企画を立案し実施」しようと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

また、それと同時に、今後、開かれた学会を目指していくためにはどうすればいいのかというテーマも考えていく必要があるのではないかと感じております。私の個人的な見解ではありますが、社会心理学会で受容される研究は、その方法論がかなり先鋭化され、専門性が高いものばかりになっているのではないかと感じる場合があります(自省も含めてです)。もちろん、専門性が高いことを否定するわけでは全くありませんが、内部の純度が高すぎてしまうと、他の関連領域を寄せつけなくなり、固く閉ざされた組織体になってしまう可能性があります。その意味で、裾野を広げ、多種多様な関連領域の方々や一般企業の方々から社会心理学会に興味をもってもらい、あわよくば、入会してもらうためにはどうすればいいのか、そのためには、どのような学会活動を行えばいいのか、なんてことを夢想している今日この頃です。

雨にも風にも負けてしまうような私一人では心許ない限りなのですが、幸いなことに頼りになる先生方に学会活動委員をお引き受けいただくことができました。前期で事務局を担当しておられた西村太志先生(広島国際大学)、前期から引き続き学会活動委員を担当していただける埴田健司先生(東京未来大学)、また、今期から新たに学会活動委員になっていただける鬼頭美江先生(明治学院大学)、木村昌紀先生(神戸女学院大学)、柳澤邦昭先生(京都大学)、笠置遊先生(立正大学)です。今後は、委員の先生方のお力を借りながら、また、会員のみならずのご意見もお伺いしながら、よい企画を考えていければと思っております。その際には、会員のみならずにご協力をお願いすることもあるかと存じますが、何卒よろしくお願いいたします。

(かねまさ ゆうじ・追手門学院大学)

## 大会運営担当

竹村 和久

このたび大会運営担当常任理事を引き受けることになりました竹村和久です。本務校の早稲田大学で2007年度の学会大会を開催させていただきましたが、前大会運営担当の坂田桐子先生から引継事項を説明いただいて、学会大会のありかたがこの十数年の間に相当変わってきたことを痛感しました。本学会が比較的大規模な学会であるため、多くの参加者を収容できるだけの会場を確保しにくく、またスタッフが足りないなどの理由で、多くの大学が主催校をなかなか引き受けられられないという大きな問題があるようです。事実、現段階でも2021年以降の主催校の交渉をしていますが引き受けてくださる大学がなく、学会としても困っている状況です。大学の人員削減や事務的な仕事が相当増えて、益々引き受けにくい状況になったのかもしれませんが、このような対応策として、学会として大会プログラム作成を手伝う、予算確保の難しい懇親会をやめて総会時の弁当を出さなくてもよいなどの主催校側の負担の軽減化を図っていますが、それにもかかわらず引き受けてくださる方がないのが現状です。前会長の浦先生が、就任時の会報で、このような学会大会の引き受け手がない現状を「フリーライド現象」と指摘されていましたが、このことは、学会大会自体が設立時とは異なった観点で多くの学会員から理解されるようになったから生じたのかもしれませんが。

日本社会心理学会の英訳は、The Japanese Society of Social Psychology ですが、本学会以外でも学会の名称に Society をあてているところはかなりあります。この英語は、学会のほかにも、社会、社交という意味があります。科学史や科学社会学の文献を調べると、歴史的には、学会は本来、学問的な交流や社交にあったようです。本学会の前身も「社会心理学懇談会」であり、学会設立にあたっては、社会心理学の研究を行っている者が意見交換、交流、懇談を行うことが主目的であったように思います。近年の動向をみると、学会大会をそのような場ではなく、単に大学院生や研究者の研究業績の場、あるいは研究業績の公表の場としてのみ捉えている人が増えてきたのかもしれませんが、おそらくそのような観点だけでは、学会大会の意義は薄れてくるように思いますし、学会大会自体が楽しくなくなってくるようにも思います。私は大会運営担当として、学会設立の原点に戻り、本来の学問的交流という観点からの学会大会を促進することを目指したいと思っています。会員の皆様からいろいろなご意見を頂戴したいと思っています。どうかよろしくお願い申し上げます。

(たけむら かずひさ・早稲田大学)

## 広報担当

藤島 喜嗣

このたび広報担当となりました昭和女子大学の藤島喜嗣です。10年ほど前、第25期の頃に川浦康至先生のもと広報委員を務めました。そのころは紙媒体からWeb媒体への移行期で、会報のあり方を変えたり、現在にいたる学会サイトの原型を考えたり、「www.socialpsychology.jp」というドメインを取得したり、といった仕事をしました。その後、学会サイトは充実し続け、今や公式サイトと広報委員会サイトの2つを運用するに至っています。提供されている情報も多岐かつ豊富で、この10年間の広報委員会の活動成果がそこにあります。その精力的な活動に心から感謝する次第です。

しかしながら、この10年間で学会を取り巻く環境はずいぶんと変化しました。数年前から指摘されていることですが、本学会の会員数は伸び悩んでいます。一時的ではあれ、減少に転じた期間もあります。新規会員の獲得は、予算の観点から喫緊の課題です。他方で、研究活動が国際化し、研究者は多くのサービスを国際学会から享受しています。国内学会に存在意義があるのであれば、その意義を適切に伝える責任が広報にはあります。また、何人かの常任理事が指摘していますが、公認心理師資格のカリキュラムには改善の余地があり、社会心理学分野について提言する必要があります。この議論において本学会が存在感を示すためにも、その活動成果を積極的に認知してもらう必要があります。これも広報の責任です。

以上のミッションを実現する中期計画の企画・実行のため、4人の方に広報委員をお願いしました。武田美亜さん(青山学院女子短期大学)は前期からのベテランです。ご事情により委員を辞退された藤桂先生に代わり、学会事務の経験もある津村健太さん(帝京大学)に加わっていただきました。そして、計画実行の中核となることを期待し、三船恒裕さん(高知工科大学)と三浦麻子さん(大阪大学)に4年任期の委員として加わっていただきました。非常に強力なメンバーを揃えることができたと感じています。その意気込みに反して、まず、このメンバーで広報活動の整理をしたいと考えます。限られた労力をロスなく注入するためには、役目を終えた活動を休止、停止することも必要でしょう。こうして地盤を固めた上で、必要とされる効果的な広報活動を展開したいと考えています。2年間どうぞよろしく願いいたします。(ふじしま よしつぐ・昭和女子大学)

\*\*\*\*\*

## 第6回春の方法論セミナー参加記

2019年3月21日(木)に明治学院大学白金キャンパスにて第6回春の方法論セミナーが開催されました。当日は、「社会心理学者のための時系列分析入門」と「社会心理学者のためのVR(バーチャルリアリティ)入門」の2つのセミナーが開催され、いずれも盛況でした。当日参加された2名の会員から当日の様子をお伝えいたします。

### 参加記:「社会心理学者のための時系列分析入門」

井川 純一

明治学院大学白金キャンパスで開催された、第6回春の方法論セミナー「社会心理学者のための時系列分析入門」に参加してきました。社会心理学会ではこの時期に非常にタイムリーなセミナーを開催していただいているので、毎年楽しみにしています。

最初の登壇者の小森先生からは、「心理学の研究にいつか役に立つ時系列分析」と題して、時系列分析の全体像について説明していただきました。小森先生の発表で最も興味を惹かれたのは、「時系列解析 for 心理学地獄めぐり MAP」。このMAPのデザインを初めて見たときには、地獄めぐりの名に恥じないおどろおどろしさを感じてしまいました。特に因果沼あたりの雰囲気は、実に地獄感が伝わってきます。また、私のような初学者にとっては、そこに書いてある用語(地名)はなんだか悪いことの起きそうな呪文を聞いているような印象すら持ってしまうくらい(個人の感想)。正直「今日は長い一日になりそうぞ」と半泣きになりそうになりながら聞きはじめたのですが、実際の分析事例を聞くと、それは地獄というよりもむしろ天国。時間はあっという間に過ぎていきます。もちろん、勉強不足の私にとっては難解に感じる部分もたくさんありましたが、個人のダイエット記録やデート時の位置情報データ、合コン時の身体動作、授業中の学生の体の動きのマッピングなど、フロアにも想像しやすい様々なデータを実例としながら時系列データ分析の楽しさについて熱弁してくださいました。限られた時間の中で、時系列データの解析の興味深さを感じることができました。

二人目の登壇者である竹林先生からは「自己報告多変量時系列データの因果沼に潜ってみた」と題して、経験サンプリング法などの分析手法を具体的な事例を上げながら説明していただきました。経験サンプリング法とは、スマートフォン等を用いて、一人の実験参加者に対して、複数の変数を反復測定する手法のこと。私自身は今まで収集したことはありませんが、近年のデバイスの発達によってこういうデータが取得しやすくなっていることは想像できます。興味を惹かれたのは、時系列データの因果に関する丁寧な分析手法(因果沼だもの)。Granger因果やネットワークモデルを組み合わせた手法は視覚的にも解釈しやすく特に臨床場面や介入の効果の検討における応用可能性を大きく感じました。また、これらの





時系列データを手元で分析する機会が少ない人にとっても、時系列データを収集する目的の一つに因果関係を明らかにしたいというニーズがあるならば(2点間の変化に関する分析をする程度であっても)聞いておいて損のない発表だと感じました。自分自身が今からやろうとしている分析における考え方のヒントをいただいたように思います。

三人目の登壇者である藤原先生からは「対人コミュニケーション研究における周波数解析」と題して、シンクロニーに関する分析手法の実践的報告をしていただきました。話者同士の身体動作の同期を、周波数解析を用いて分析する方法について実践的に理解することが発表の主題となっていました。このセクションのゴールが「周波数ドメインの世界で一泊二日の観光」ということなので、細かい分析方法についてはぼんやりと見ていだけで、勝手に私の脳がシンクロニーするに違いないと思いながら観光をさせてもらいました(それでも概要が理解できるともわかりやすい説明でした)。質問紙で測定した主観的データとこうした客観的指標を組み合わせた研究を見ると、これからの研究の応用可能性を意識させられます。藤原先生も述べられていましたが、一昔前まではこれらのデータを研究に用いるために、分析の前段階のデータ収集時に大きなコストをかける必要がありました。悪い言い方をすると、客観的指標を積極的に導入しないための「言い訳」が用意されていたわけです。一方、近年はデバイスや分析ツールの飛躍的進化により、ぐっと身近になっていることを改めて感じました。発表の前半で紹介していただいた様々なツールを実際に帰宅後触ってみたのですが、フリーのソフトやコードが無償で公開されている例も多く、先人たちに感謝ばかりです。

ありがたいことに、動画配信もしていただいていたのですが、講師の先生たちのアツイ息遣いを感じることができたので、わざわざ大分から参加してよかった思える有意義なセミナーでした。一方、こうしたセミナーでは毎回感じることはありませんが、自分自身の力不足、勉強不足と向き合わざるを得ない時間でもありました。小森先生の発表タイトルにある「いつか」を「今」に変えられるようにいろいろトライしてみなくては。セミナーを企画していただいた、講師のみなさま、学会活動関係者の皆様ありがとうございました。

(いがわ じゅんいち・大分大学)

## 参加記:「社会心理学者のための VR 入門」

紀ノ定 保礼

私は理工系の大学に勤務しているため、周りには VR を用いた卒業研究に取り組む学生もいます。例えば 2018 年度は、同僚の定國伸吾准教授の研究室で、「Leap Motion を用いた魔法発動のための二段階動作インタラクションの検討」という卒業論文を執筆した学生がいました(その後、図学会中部支部例会で発表)。Leap Motion は手の検出に特化した機器で、指の開閉状態や手の位置を、容易に検出可能です。彼らはこれを利用して、「魔法っぽい」ジェスチャ認識の実装や、VR 空間内における魔法演出との関連づけを容易にするシステムを作成しました。そのシステムを用いると、手を振り下ろすようなジェスチャに雷系の魔法演出を、手を突き出すようなジェスチャに炎系の魔法演出を関連づけることができます。私と同世代の方々であれば、きっと子どもの頃に人差し指を天に向けて「ライデイン！」と叫んだり、両手を合わせて突き出しながら「(灼熱)波動拳」の練習をしてみたりした経験があるでしょう。その当時の夢を、疑似的とはいえ、実現することができるようになったのです。

自分の研究の話もさせて頂くと…私は認知心理学や社会心理学の知見を応用して、交通環境におけるヒトの行動を研究しています。統制された環境下で交通行動を研究する手段の一つが、ドライビング・シミュレータ(以下 DS)を用いた実験です。しかし通常 DS 装置は、価格や専有面積、維持管理のコストが大きく、冷蔵庫でも買うかのように気軽に購入できるものではありません。また、多くの DS では液晶ディスプレイやスクリーンに映像を投影させるため、没入感が十分ではないこともあります。しかし最近では、ヘッド・マウント・ディスプレイ(HMD)を利用して DS を操作する、つまり「VR 空間内で運転する」ということが可能になりつつあります。このような背景から、私がかねがね VR に関心がありました。

当日のセミナーでは、まず豊橋技術科学大学の北崎先生が「バーチャルリアリティ学序論」と題して、VR の歴史や VR を活用した心理学的研究をご紹介します。 「VR 酔い」を低減させる方法について質問が出た際には、VR 酔いが発生する機序から解説してくださり、ヒトと VR の両方に対する深い理解が、北崎先生のご研究を支えていらっしゃるのだということが、とてもよく伝わってきました。

次に東京大学の濱田先生が「バーチャルリアリティの現実適用」と題して、エクササイズや第二言語の語彙習得などに応用した研究事例をご紹介します。濱田先生は、とても柔軟な発想とそれを実現する高い技術をお持ちで、「なんでこんなアイデアを思いつくの?!」とワクワクしながら、とても楽しく発表を拝聴させていただきました。思わず人に話したくなるような、そんな研究のオンパレードでした。

最後に、北崎先生の研究室の大学院生である近藤先生は、Unity を用いて実際に VR 環境を構築する方法をご紹介します。完成形がいかに魅力的でも、必要となる技術水準があまりに高ければ、手を出しづらいもの。しかし近藤先生は、そのような不安を払しょくするように、丁寧に実演してくださりました。休憩時には、実際に様々な HMD を装着して VR を体験することができたため、参加者は実際に購入に踏み切るかどうかや、購入した場合にどのように自身の研究に活用するかを、かなり具体的にイメージすることができたのではないかと思います。

ここまでの内容だけでも十分満足だったのですが、最後の質疑応答の時間に、もう一つ「来てよかった！」と思える出来事がありました。それは、私が北崎先生に対して、こんな質問をさせていただいたときのことです。

VR にはかねてから関心があったのですが、技術や製品がどんどん新しくなっていくので、購入に踏み切るタイミングがなかなかつかめませんでした。仮に今後改良が進んでいくとしても、もうガラッと技術が変わるようなことはないのでしょうか。



この質問に対して、北崎先生はほんの少しだけ沈黙を挟んだのちに、「面白い質問ですね」とおっしゃいました。ここだけを切り取ると、あたかも良い質問だと褒められたかのようにもみえますが、北崎先生はこう続けられました。「我々は、技術がガラッと変わることを期待しています」

この言葉に、私はハッと息をのみました。自分はなんてつまらない発想をしていたのだろう、と。技術がガラッと変わったら、それだけ研究の可能性が広がるではないか。そしてガラッと変わった技術が、もはや VR と呼ばれていなくてもいい。「VR の研究」という天井を勝手に作ってしまう必要はない—。

実際この先、もっともっと新しい技術が現れることでしょう。そしてその技術が自分の手のひらに収まる日を座して待つのではなく、手を伸ばして掴みにいく好奇心が必要なのだと、学ばせていただきました。

ご登壇くださった先生方、企画くださった学会活動委員会の先生方に、心より御礼を申し上げます。(きのさだ やすのり・静岡理科大学)

※2つのセミナーの開催情報は、下記のサイトから確認することができます。あわせてご覧ください。

「社会心理学者のための時系列分析入門」セミナーのサイト → <https://sites.google.com/view/jssp2019seminar-timeseries/>

「社会心理学者のための VR 入門」セミナーのサイト → <https://sites.google.com/view/jssp2019seminar-vr/>

日本社会心理学会「セミナーページ」 → <http://www.socialpsychology.jp/seminar/index.html>

\*\*\*\*\*

## 高木修先生「瑞宝中綬章」を受章

令和元年春の叙勲において、本学会元会長で現在名誉会員の高木修先生が、瑞宝中綬章を受章されました。心よりお祝い申し上げます。先生よりコメントを頂戴いたしましたので、掲載いたします。

### 「瑞宝中綬章を受章して」

高木 修 先生

私は、令和元年の春の叙勲で瑞宝中綬章を受章しましたが、瑞宝章は、国及び地方公共団体の公務などに長年にわたり従事して功労を積み重ね、成績を挙げた人に授与され、その貢献度に応じて大綬章、重光章、中綬章、小綬章、双光章、単光章に分かれます。

文部科学省関係の受賞者は、5月28日(火)、国立劇場での伝達式で勲記と勲章を受領し、その後皇居に移動し、前日トランプ大統領夫妻を招いて晩餐会が開かれた豊明殿で新天皇に拝謁し、「長年にわたり国や社会の発展に貢献されましたことに感謝します。これからは健康に留意されて過ごしてください。」とのお言葉を賜りました。しかし、私自身いかほどに貢献出来たのか自信がありませんが、簡単に振り返ってみます。

京都大学の学部、大学院で社会心理学を研究し、1968年4月に関西大学の社会学部助手となり、定年退職して名誉教授になるまで同校で43年間勤めました。この間、教育面では、学部、大学院開設の「対人社会心理学」関係の講義科目を担当し、加えて、東京大学、大阪大学、名古屋大学など計14校の国、公、私立大学でも講義しました。少数指導の演習科目も担当し、取得させた学位は、学部の学士号が589名、大学院の修士号が45名、博士号が16名と多数に及び、彼らは、現在、産業界や研究・教育機関で活躍しています。

一方、研究面では、学部、大学院での理論的研究として、行動の準備状態とされる基幹概念「態度」に着目し、実生活ではそれらの対応性が低い「非一貫性問題」を「態度の構造化(発達)度」の差異から説明出来るとして、態度の3成分を測定する方法を独自に開発し、当時最新の因子分析法や数量化理論を用いて解明しました(1984年「態度構造及び態度と行動の関係に関する研究」と題する論文で京都大学文学博士号を取得)。

研究の社会的現実性と有用性を高めるために、「非一貫性問題」を日常の生活行動で捉えて研究を進展させました。1975年大学付置研究所の環境問題研究員に応募し、水質汚濁の海や湖沼の富栄養化現象、赤潮は合成洗剤が原因で発生していることを知りながら主婦が石けんに切り替えないゆえの問題と位置づけ、その理由を各地の消費者団体の協力を得て研究しました。環境破壊が危惧される大規模地域開発計画を安易に受け入れる住民の心理と行動についても研究しました。環境社会心理学研究の草分けと考えています。

私の研究テーマに関連する専門書を翻訳した関係で、1979年スタンフォード大学のジンバルド教授の基で在外研究を行いました。今注目すべきテーマは何かと話し合ったところ、善良な市民の無関与が引き起こしたキティジェノベーゼ嬢殺害事件以来注目されている「援助行動」だとして、文献検索システムを使って研究情報を集め、日本に持ち帰り、仲間と一緒に研究を始めました。意思決定過程や行動類型、動機などの基礎的研



究から実際の災害時の救援活動の実践的、応用的研究まで幅広い研究を積み重ねて、社会心理学における欠くことの出来ない領域を開拓することができました。

私の教育、研究活動のいずれにおいても、その始まりや発展には、貴重な人々との出会いがありました。今回の叙勲は、彼らのご指導、ご支援、ご協力なくしてあり得なかったと確信しています。この機会に、彼らに心から感謝したいと思います。(たかぎ おさむ・関西大学名誉教授)

\*\*\*\*\*

## 河村悠太氏「第9回日本学術振興会育志賞」受賞

本学会の会員である河村悠太氏が、第9回日本学術振興会育志賞を受賞されました。心よりお祝い申し上げます。本学会推薦から初の受賞となっています。今回、河村氏から受賞コメントをいただきましたので、掲載いたします。

### 受賞報告: 第9回日本学術振興会育志賞

河村 悠太

昨年度、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程3年の時に、日本社会心理学会よりご推薦をいただき、2019年3月に第9回日本学術振興会育志賞を受賞いたしました。このたび執筆の機会をいただきましたので、貴重な紙面をお借りして受賞の報告をさせていただきたいと思っております。

育志賞は、上皇陛下の天皇御即位20年に際して創設された比較的新しい賞で、勉学や研究に励んでいる博士後期課程の学生が主な対象となっています。第9回では、書面選考および面接選考を経て、人文科学・社会科学・自然科学の全領域から18名の受賞者が選ばれました。受賞した私の研究テーマは「利他行動の促進・抑制要因の解明: 評判への関心による影響」です。この研究は、利他行動を駆動する心理的要因としての評判への関心に着目したものです。肯定的評価・評判に対する接近的志向性と否定的評価・評判に対する回避的志向性を区別し、前者は状況にかかわらず利他行動と正に関連するのに対し、後者の関連は社会的規範に影響を受ける可能性を示唆しています。受賞対象となった一連の研究をまとめるにあたっては、受賞当時所属していた京都大学大学院教育学研究科教育認知心理学講座のみならず、学会や研究会等を通して、多くの方々にご指導、ご協力をいただきました。特に、本賞にご推薦下さった楠見孝先生(京都大学)、野村理朗先生(京都大学)には大変お世話になりました。また、申請に際しては、前田駿太先生(東北大学)から温かいご助言をいただきました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、ご推薦下さった日本社会心理学会会長(申請・受賞当時)の浦光博先生、各種の手続きにおいてご尽力下さった事務局担当(申請・受賞当時)の西村太志先生をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。本学会に所属している一大学院生のために多大な労力を費やして下さったことに深く感謝しています。今後も本学会から育志賞を受賞される方が現れることを心より願うとともに、私も今回の受賞を励みに、さらに良い研究を行っていけるように一層精進して参りたいと存じます。

(かわむら ゆうた・神戸大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

\*\*\*\*\*

### 会員異動(2019年3月1日~2019年6月20日)

#### 入会

##### 《正会員》

**一般会員** 秋本 陽子(東京消防庁小石川消防署総務課主任主事)、石井 拓真(Bar Second Room)、宇宿 公紀(東京都立瑞穂農芸高等学校)、川本 哲也(東京大学大学院教育学研究科特任助教)、久保田 貴之(静岡産業大学経営学部講師)、久禮 まゆ(同志社大学こころの科学研究センター研究員)、小林 輝美(杏林大学外国語学部英語学科講師)、齋須 要文(東京電力ホールディングス株式会社)、重森 雅嘉(静岡英和学院大学短期大学部現代コミュニケーション学科教授)、田中 陽平(東北大学大学院経済学研究科博士研究員)、中村 倫子、廣瀬 清人(聖路加国際大学看護学研究科教授)、向居 暁(県立広島大学人間文化学部国際文化学科教授)、尹 成秀(帝京大学文学部心理学科助教)、分部 利紘(福岡女学院大学人間関係学部心理学科)

**大学院生** 飯塚 優乃(神戸女学院大学大学院人間科学研究科)、飯村 大智(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、池田 利基(筑波大学大学院人間総合科学研究科 感性認知脳科学専攻)、石橋 加帆(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)、井上 悟(帝塚山大学大学院心理科学研究科)、梅谷 凌平(立正大学大学院経営学研究科)、大田 舞(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)、小野 由莉花(同志社大学大学院心理科学研究科)、加藤 聖子(広島大学大学院総合科学研究科)、川杉 桂太(早稲田大学大学院文学研究科)、清末 有紀(広島大学大学院教育学研究科心理学専攻)、熊井 優日(安田女子大学大学院文学研究科)、小林 彩乃(東洋大学大学院社会学部社会心理学専攻)、佐藤 大志(広島大学総合科学研究科)、蘇 雨青(東洋大学大学院社会心理学専攻)、田中 椋也(立命館大学大学院人間科学研究科)、辻 啓人(名古屋大学大学院情報学研究科)、苔米地 飛(東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学研究室)、中越 みずき(関西学院大学大学院社会学研究科)、中村 日海里(三重大学大学院教育学研究科)、野田 夏希(日本大学大学院総合社会情報研究科人間科学専攻)



攻)、服部 典利子(広島大学大学院総合科学研究科)、福林 直(筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻カウンセリングコース)、藤川 翔子(東京女子大学大学院人間科学研究科人間社会化学専攻)、水鳥 翔伍(北海道大学文学院人間科学専攻行動科学科)、水野 景子(関西学院大学大学院社会学研究科)、山田 純加(東京女子大学大学院人間科学研究科)、林 静雯(関西学院大学大学院社会学研究科)

#### 退会

相田 直樹、青野 篤子、雨宮 有里、石井 滋、石丸 彩香、岩熊 麻由美、岩田 昇、大谷 みちる、大対 香奈子、奥 正廣、小田 喜理江、小野 弘、織田 涼、梶谷 一夫、勝村 史昭、喜多 敏正、神山 進、小島 賢一、齋藤 美穂、齋藤 美松、坂口 哲司(物故)、佐藤 喜春、澤口 右京、篠原 由花、渋谷 昌三、下坂 剛、徐 キョウテツ、菅田 圭次、田垣 正晋、高橋 伸彰(物故)、高橋 美保、竹下 浩、谷口 弘一、David Dalsky、張 鳳芝、トウ ケイ、富田 隆、永井 聖剛、中島 美奈子、中西 裕子、仲嶺 真、新倉 アキ子、西河 正行、野田 隼人、濱崎 洋嗣、坂西 友秀、平澤 真理恵、深田 仁美、藤田 欣也、細江 達郎、馬 景昊、松井 洋、三田村 朋子、森 康俊、山田 純弥、行平 真也、横光 健吾、吉田 昭久、渡邊 席子、(株)マーケティング・サービス

#### 所属変更

李 津娥(慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所)、西村 洋一(聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科)、加賀美 常美代(目白大学人間学部心理カウンセリング学科/大学院心理学研究科)、三浦 麻子(大阪大学大学院人間科学研究科社会心理学研究室)、武田 圭太(日本大学商学部)、勝谷 紀子(北陸学院大学人間総合学部社会学科教授)、小笠原 盛浩(東洋大学)、中里 直樹(大分大学福祉健康科学部准教授)、加藤 潤三(立命館大学産業社会学部)、梶間 幹男(名古屋刑務所分類審議室)、阿部 晋吾(関西大学社会学部)、太田 仁(奈良大学社会学部心理学科)、長谷川 孝治(駒澤大学文学部)、立脇 洋介(九州大学 アドミッションセンター)、野寺 綾(奈良県立大学地域創造学部地域創造学科)、棧敷 まゆみ(鈴鹿大学准教授)、水上 喜美子(金沢大学医薬保健研究域医学系精神行動科学助教)、市村 美帆(和洋女子大学)、村山 陽(東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム)、塩谷 尚正(梅花女子大学心理こども学部心理学科准教授)、藤原 勇(聖心女子大学現代教養学部講師)、川嶋 伸佳(神奈川大学人間科学部准教授)、山中 祥子(立命館大学BKC社系研究機構)、山本 真菜(日本大学商学部専任講師)、豊川 航(Department of Psychology, University of Konstanz 研究員)、松原 詩緒(岩谷学園専任教員)、今井 葉子(茨城大学 地球変動適応科学研究機関(ICAS)学術振興研究員)、高沢 佳司(皇學館大学文学部コミュニケーション学科)、伊藤 健彦(東洋大学情報連携学部助教)、石井 健一(文教大学情報学部情報社会学科教授)、中山 真(皇學館大学文学部コミュニケーション学科助教)、安部 健太(帝京大学高等教育開発センター助教)、竹部 成崇(大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科専任講師)、山田 順子(玉川大学脳科学研究所研究員)、正木 郁太郎(東京大学大学院人文社会系研究科研究員)、玉井 颯一(高知工科大学情報学群)、宮川 裕基(追手門学院大学心理学部特任助教)、宮島 健(奈良大学社会学部心理学科社会福祉学部福祉心理学科)、井上 裕香子(九州大学持続可能な社会のための決断科学センター特任助教)、加藤 仁(北陸学院大学人間総合学部社会学科)、中川 裕美(大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科研究助手)、古川 善也(愛媛大学教育学部特定研究員)、大橋 卓真((株)マクロミル)、喜入 暁(大阪経済法科大学法学部助教)、井上 和哉(首都大学東京人文社会学部・心理学教室)、神野 雄(東京経営短期大学専任講師)、後藤 晶(明治大学情報コミュニケーション学部専任講師)、仁科 国之(高知工科大学助教)、河村 悠太(神戸大学大学院人文学部研究科心理学研究室/日本学術振興会特別研究員PD)、小林 麻衣子(明治学院大学心理学部心理学科助手)、山口 文恵(国立研究開発法人日本原子力研究開発機構)、笠原 伊織(名古屋大学大学院情報学研究科心理・認知科学専攻)、福留 広大(福山大学)、村中 昌紀(静岡福祉大学社会福祉学部福祉心理学科講師)、中山 賢二((株)NTTドコモ)、佐々木 秀綱(横浜国立大学大学院国際社会科学研究院)、沼田 真美(大妻女子大学人間関係学部人間関係学科)、菅谷 友亮(三重大学特任講師)、足立 英彦(志學館大学)、大塚 彩美(早稲田大学社会科学部)、中川 紗江(株式会社アドバンテッジリスクマネジメント調査研究部研究員)、越智 宏朗(専修大学大学院)

\*\*\*\*\*

### 『社会心理学研究』掲載(予定)論文

#### 第35巻第1号(2019年7月刊行予定)

原田 知佳・土屋 耕治 社会性と集団パフォーマンス:他者の感情理解と自己制御に着目したマルチレベル分析による検討  
 稲増 一憲・清水 裕士・三浦 麻子 評定尺度法の反応ラベルによる影響の補正:公的組織への信頼を題材として  
 鷹阪 龍太・山田 一成 公募型 Web 調査における TIPI-J の利用可能性の検討

\*\*\*\*\*

#### 編集後記

第30期広報委員会として初めての会報をお届けします。会報は、会員向け広報の役割を果たしますが、それだけではありません。記録を残す大事な媒体だと思います。雑誌や学会発表論文集は会員の日々の研究活動を記録し、議事録などは常任理事会や理事会、総会での意思決定を記録します。それに対し、会報は幾分曖昧で、部分的かもしれませんが、会員間の交流や一員会の考えを記録しています。何気ないスナップ写真がその時代の様子を切り取った史料となるように、我々の会報も後世、社会心理学を捉え直す際の重要史料になるのではないかと考えています。そういうこともあり、できる限り会員の皆様が日々感じられていることを記録として残したいと思います。広報委員会から執筆依頼があったときも、こういった事情をご考慮いただき、ご協力をお願いいたします。

(藤島 喜嗣・広報担当常任理事)